Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-20

〈資料〉一七世紀におけるロシアと世界市場

山瀬, 善一

(Citation)
国民経済雑誌,94(5):63-67

(Issue Date)
1956-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/80040468

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/80040468

KOBE UNIVERSITY

資料

一七世紀における
ロシアと世界市場

スウェーデンの経済史学は Heckscher, E. F. (1879–1952) を中心として大いに発展して来た。今や、国際的な機関誌 (The Scandinavian Economic History Review) の発刊 (1953) を見るに及んで、巨匠なき後のスウェーデン経済史学界が如何に健全な歩みを示しているかを窺うことが出来る。この機関誌には、日なお浅きに拘らず、既に世界の学界から注目を浴びた論文も少なからず発表されて来ている。ここでは当誌の最近号 (vol. III, no. 2, 1955, pp. 123–162) に掲載された Ohlberg, Arne の論文、"Russia and the world market in the seventeenth century, a discussion of the connection between prices and trade routes" について述べ、スウェーデン経済史学界の事情を知る一助ともしたい。

一六世紀末、ロシア市場を西ヨーロッパに結びつける三つの主要な通路があつた。即ち、(一)ポーランド貫通の陸路、(二)バルチック海経由の海路、(三) Archangel から白海を横切る海路がこれである。第一の通路は Poznan, Krakow, Breslau 経由 Leipzig に至るもので、陸路として当時服さねばならなかつた技術的・政治的障害は、輸送の容易な、重量に比し高価な商品 (ロシアからは毛皮及び蜜蠟、ロシアへは良質織物及び金銀細工品) の通路となつていたに過ぎない。又敏速と安全とを必要とする正金の輸送及び通信はこの通路を利用することが多かつた。第二の通路は古くからのものであるが、一三世紀の中頃デンマーク迂廻の通路が開かれることによつて木材、穀物、亜麻、大麻、灰汁の如き嵩のある商品輸送に耐える様になつた。しかしバルチック海域に固有の港を持たないロシアは、この海域の政治的事情の変化に従いその利用度を変えた。第三の通路は、時折航行された記録が残存するが、まだ一六世紀の初期では西ヨーロッパとロシアとを結ぶ商業路として利用されていなかつた。しかし、一六世紀に出版されたロシアについての書物にはこの通路を詳しく取扱うものも現われて来た。イギリスにおけるシナへの北廻り遠征の計画は、一五五三年五月に実行されたが、途中強風のため難波し、その船隊中の一隻 (Richard Chancellor によつて指揮せられた第三船) が八月二十四日に Divina 河口にある St. Nicholas 修道院の近くに漂着した。Chancellor は白海海岸からモスコーに赴き、ロシア王 Ivan IV の好意に満ちた款待に預り、イギリス商人への保護と完全なる通商権とを約束するイギリス王 Edward VI 宛書翰を受けた。これが次いで一五五五年二月二十六日のモスコー会社創設の特許状へと結

果した。このことを思う時に、この漂着は西ヨーロッパとロシアとの商業上の直通路を開拓するものとして重要である。モスコー会社のこの通路の利用は、一五六六―八一年間にその頂点を示した。その後オランダ人が競争者として現われ、漸次イギリスの取引活動を侵蝕して行つた。Archangel の利用は、ロシアからの輸出港としてよりも寧ろ輸入港としてロシア人にとり重要であつた。なんの妨害もなく武器と軍需品とを輸入することが出来たからである。

バルチック海通路と白海通路との関連性の存在については、これ迄も意見を異にしている。Sveriges krig, 1611–1632 の著者はかかる関連性の存在を否定した。ところが、Attman, A はロシア市場は各々孤立した生産―取引地域からなつているのでなく、各地域は相互に結び合い、輸出向商品は白海海岸か、バルチック海海岸かのいずれかに向けられること、即ち、生産地域の単一性と各々の取引地域の関連性の存在を主張する。Nilsson, Seven A. は Attman の見解を輸送技術の見地にのみ根拠を求め、迂廻輸送が経済的にどれ程有利であるかを検討することの必要を説く。かくして、Attman の見解とは異なる結論――白海通路は北部ロシアの生産地域に自然の捌口を与えたという点で重要である――を引き出す。この様な見解の相異について、Ölberg は白海通路と西ヨーロッパの物価との関係を分析することから解答を与えんとする。

先ず、一七世紀に白海通路を経由した商品は、どの様な構造を持つていたかを問題とする。Attman は二つの史料[註]を利用して、一六四〇年と一六五〇年との事情を百分比で表示している。（図表 I）Attman は、この表から de Rodes の註釈に従い、高価格の時にのみここから輸出された穀物とペルシア絹とを除外することにより経常的輸出商品を求めた。しかし、この除外した商品を考

図表 I

商品項目	1640	1950
ロシア・リンネル及びホームスパン，絨毯	—	2.5
灰汁	—	10.3
豚脂及び獣肉	—	2.8
石膏及び雲母	—	0.2
穀物	—	21.5
ペルシア絹	—	1.2
亜麻仁	—	1.2
大麻綱	3.4	—
錨索及び太脂	3.2	—
獣皮及び生皮油	6.1	10.9
鯨蠟	28.6	31.8
蜜	2.3	0.8
毛	3.5	1.4
キャビア	46.5	8.4
豚毛	3.3	2.6
薬品及びタール	2.6	4.1
ピッチ及び	0.5	0.3

慮することにより寧ろ Archangel の社会経済史的意義が特徴的に描き出される。一六五〇年のリストの三九・七％が一六四〇年のリストに現われていない。他方、一六四〇年のリストの六・六％が一六五〇年のリストに現われていない。又、一六五〇年のリストの絶対数は、一六四〇年のそれの二倍以上でもあつた。一六四〇年のリストにない商品の中百分比の最大を占める穀物は、当時

の註釈からも知られる如く、西ヨーロッパの物価を代表しているAmsterdam市場で高価格を示した際にのみArchangelから輸出せられた。この事情は穀物に次いで大きな役割を占めていた灰汁にも当嵌る。一六四〇年のリストにのみ現われる大麻については、両リスト年の中間期間にRiga大麻の価格が可成り下落していることが知られる。穀物、灰汁、大麻は共にロシアの南部で生産され、嵩ばつた安価な商品であつた。かくて、或る商品にとつての高価格とそれ等商品のArchangelを経由する輸出との間の相関関係は、ロシア内部におけると共にArchangel—西ヨーロッパ間の輸送距離、即ちその費用にArchangelにおける取引危険を加算したものと結ばれている。両リストに共通に現われる商品の中、蜜蠟、毛皮、キャビア（ちょうざめのはらごの塩漬）、薬品及び豚毛は嵩に比し高価な商品で、輸送費は売価に重要な影響を持たなかつた。ピッチ、タール、鯨油はArchangel附近で生産され、獣脂はロシアの独占的商品であつた。

註　モスコー在住の或るスウェーデン人が本国統治者に送つた一六四二年より前の或る一年にとつてのArchangelから輸出せられた商品リスト、及びスウェーデン統治者の命により一六五三年に書かれたJohan de Redes' Berättelse om Ryslands handel中に記入されている一六五三年より前の或る一年にとつてのArchangelから輸出せられた商品リスト。又、他種の史料として一六七四年頃のArchangelの発展についての同時代の観察、Kilburger, J. Ph.: Kurzer Unterricht von dem Russischen Handel (Maggin für die neue Historie und Geographie angelegt von A. F. Büsching, III, 1764)が挙げられる。

白海通路で輸送せられたこれ等商品を略々同時期におけるバルチック海経由での輸出と比較して個別的に考察して見るならば、次のことが言える。大麻はArchangelから時折輸出されたが、バルチック海経由の輸出と比較し得る量ではなかつた。しかし、Amsterdamにおける大麻価格が最高であつた二つの時期、一六三〇—五年と一六六四年頃とにおいて、Rigaから積出されたものの中Soundを通過した大麻量は最低を印している。亜麻はArchangelからの輸出を示す前掲の二つのリストの中には記載されていないが、亜麻仁は時々無視出来ない数字を示している。このものも少ない史料であるが、価格によつて輸送路が変更したことが認められる。穀物は価格の平常な時は、Riga及びKönigsberg経由で輸出されていた様に思われるが、高価格の間はArchangelからの輸出が非常に増大した。Narvaはバルチック海におけるロシアの唯一の港であつたが、一五八一年ロシアの手を離れて以来、Archangelのために特に著しい打撃を蒙り、蜜蠟、獣脂、生皮、皮の取引における地位を永久に奪い取られた。獣脂、生皮、皮においては、Archangelがバルチック海域の総取引高を減少させる結果を持つた。又、穀物輸送のためオランダ人が必要な船舶をバルチック海から白海に振替えた時さえあつた。かくしてArchangel経由の積荷は量においても決して重要ならざるはなく、或る商品領域においては、白海の商業及び海運がバルチック海地域のそれに主

要な競争者として立ち現われた。

以上、Archangel 経由の輸出と価格とがなんらかの関連を持つていることを示してきた。しかし、その相関関係を解明するには個々の商品についての特殊な事情が考慮されなければならぬ。灰汁、大麻、亜麻仁の如き生産物は、西ヨーロッパでは十分な生産を見ず、バルチック海地域及びロシアの独占に等しいものであつた。故に、バルチック海地域からの供給になんらかの障害が生じた場合にこそ、Amsterdam での該商品の価格騰貴が生じ、これが Archangel からの輸出を刺激するという結果となつた。しかし、穀物については事情が異なる。既に一六六〇年 Danzig 商人 Johann Kestner がその小論文 Bericht wie und aus was Ursachen der Handel in Danzig abgenommen で指摘している如く、Amsterdam の穀物価格はバルチック海地域からの積出しとは別個に、寧ろ西ヨーロッパの収穫事情及び市場事情によつて決定せられた。一六二〇年代にスウェーデン軍隊はバルチック海地域の穀作地帯の大部分を掌中に収め、穀物独占の地位を確立する一六二三年には早くも Amsterdam の穀価は記録的上昇を示し、Archangel からの穀物輸送を可能ならしめた。一六二八年及びそれに続く年にイギリス人及びオランダ人はロシア穀物を求めて Archangel に赴き、スウェーデンの政策に対抗する。スウェーデンも亦自らロシア穀物を掌握せんとし、しかも部分的にはこの目的は達せられた。だが、この様なスウェーデンの独占維持の手段に拘らず、一六三一年には下落し始め、翌年にはごく普通の水準にまで下がつた。この事実から見ても、穀物危機の原因は明かに西ヨーロッパに限定された現象の中に求められねばならぬ。Amsterdam における穀価の絶頂とバルチック海地域からの積出しの障害とが、たまたま一致したことについて一般的説明を与えることは出来ない。

相関関係の解明には、個々の商品の特殊事情が顧られなければならぬが、価格を媒介としてバルチック海通路と白海通路とが二者選一的地位にあつたことは、認められる。こゝから吾々は Attman の主張するロシア市場の単一性を語ることが出来よう。Narva がロシアの手を離れるや、Archangel を建設し、前者に対抗させたロシアの政策、白海経由で有望なロシア産物の買占めを企図したイギリス・モスコー会社の施策、穀物の独占を確保するためのスウェーデン統治者の諸手段等すべてこのロシア市場の単一性を前提としたものであつた。これに加えて、最大の商人として活動したツァーが、その専制的中央権力を商業に及ぼしたこと並びにモスコーを中心とする道路網の完備は、輸出商品を——長期的であろうと短期的であろうと——統一的に方向づけることへの背景を与えた。白海通路はかかる経済的意味を持つのみならず、ロシアにとりバルチックの政治的な煩しさから逃れる政治上、軍事上の重要な通路でもあつた。しかし、一七二一年の Nystad 条約後、St. Petersburg（現在の Leningrad）が建設され、事情は根本的に変化した。今や、白海通路はロシアにとり二次的意味しか

持たず、ツァーはArchangel経由の輸出を制限し、或る商品については禁止の措置をとり、貿易はバルチック海地域に向けられた。

最後に、白海通路の繁栄時における各国の政策より、この通路の意義を再考する。バルチック海域のNarvaが未だロシアの掌中にある間は、Archangelの利用はその開拓者であるイギリス人に殆んど独占的に委ねられた。これにはツァーがイギリスとの友好関係を保たんとする政治的理由が有利に作用していた。しかし、ツァーの意図とイギリス王朝の意図とは必ずしも一致していた訳ではない。一五七二年にはオランダにも亦、更に続いて他の諸国にもこの通路での通商特権が与えられるに至つた。しかし、オランダの金融が次第に他の諸国を抑圧していつた。他面、一七世紀を通じて白海通路は次第にバルチック通路を侵蝕して行く。又、スウェーデンのロシア取引については、その意義において見解が分れている。或者は可成りの重要性を与えるが、他者はこの事実を認めない。しかし、余り現代的見地から量的にのみ判断してその意義を決定してはならない。スウェーデン人にとつてロシア市場の価値は、ロシア商品を西ヨーロッパに供給する仲介者としての独占をかちうることにあつた。バルチック海地域を支配すると同時に、白海通路への介入がなされた事実は独占を完全にすることを示すに他ならない。ロシアがNarvaを喪失した後は、嘗てイギリスに与えた様な白海通路の独占は如何なる国にも与えられず、これがスウェーデンの完全独占への野望を挫く結果となり、ロシアにはロシア市場の均衡を保つための本質的前提条件となつた。

（山瀬善一）

輸入価格とインフレーションの關係について

——一九五〇—一二年の英国の場合に徴して——

一

英国は一九四九年のポンド切下げ以降朝鮮動乱の甚大な影響をまともに受けてインフレーションの昂進に見舞われ国際収支の悪化ひいては経済危機は不可避とされたが之を克服しマクミラン・ポリシー等の効果が今日の英国経済を導いたがここに掲げる一九五〇—五二年の英国経済の経験を分析したメイナードの論文(註) G. W. Maynard: Import Prices and Inflation: The Experience of the United Kingdom 1950–2. Oxford Economic Papers. vol. 7. No. 3. Oct. 1955. は吾々にとつて極めて示唆深く日本経済のここ数年の苦しい道と対比する時、より大いに意味をもつものである。即ち、最近約七・八年間、英国の小売物価は大体四割方騰貴を見せているが、この程度ならこの時期では何も他の国に比してインフレーションは極端なものではない。併し、このような長い価格インフレは当然社会的に種々の社会問題を惹起し、少なからぬ不安へ導くのは否めないことである。